

プラトーン 哲學資料論 (中)

三 井 浩

(六) 眞僞と時順

上掲(本誌昭和十六年十二月號五一頁)「プラトーン著作年表」中眞僞並びに時順上特に問題となる諸項について述べておき度い。

(1) 眞僞上の問題

眞作・僞作といふ問題は經驗科學(史學)上の問題であるが、之を徹底的に考究して行けば當然哲學の(世界觀と認識論上の)根本問題に撞着する。のみならず、經驗科學の問題であるといふまさに其點に哲學的な意味がある。今はこの問題に詳しく立ち入るべき時ではない。只次のことだけを述べておき度い。我々がもし徹底的一元論(物的にせよ心的にせよ非物非心的にせよ)の立場に立つならば、「某の作」といふことは假名に屬し、結局は無意味に歸する。「誰々の作」といふ時、即ち眞僞を問題とする時、我々は責任感を持つ哲學的人格の自由を前提してゐる。もとよりかゝる人格は孤立離存して哲學するものではない。然し一は一切によつて成ると雖も哲學する一は自己の自由に於て哲學する。哲學上の著作の眞僞論は宗教もしくは神學上に於ける眞僞論に對して、事柄そのものに根ざす意味を

有してゐる。佛教に於ける偽經論の如きは佛教そのものの立場からは、考究の價値なき戲論にすぎぬであらう。一切は十身佛の説法であるか、或ひは「たとひ偽經なりとも、佛祖もし轉學しきたらば、眞箇の佛經祖經なり」(正法眼藏轉法輪)といふべきである。其處に於ては經驗科學的研究は無意味にきする。哲學上の著作は一方に於ては民族を主體とする民論・神話から自己を區別するとともに、他方に於ては神または法界を主體とする宗教・神學とは別箇の世界に於て誕生する。自由なる經驗科學的研究を容認し之を介して進展しながら却つて之に眞箇の意味と光とを附與するもの——それが即ち哲學である。人格の自由なきところ、其處には眞僞・善惡は存しない。禁斷の果を食つた人間の惱みを知る者のみ、また探求と精進との悦びを知る。

次に、此處に眞作・僞作といふのは絶對的な意味ではないといふことである。絶對的に確實と云つても然か考へらるゝといふにとどまる。眞僞はたとへば↑↓の兩方向に緊張する理想的極元を意味する。従つて眞僞に程度あり、中間に疑作が存する。其處に無限の探求があり、努力がある。

眞作については「本論」に於て再び觸れる機会があるが、僞・疑作については再説を試みない。従つて此處では主として僞・疑作について(特に問題とならないものについても)述べることにする。

(一) 僞作。「僞作」といふ言葉には(1) 贋作(2) 誤認作の兩義がある。(1)は他人が僞る意圖を以つて偽造せるものである。之に對し(2)は他人の作が誤つてプラトーン作と認められ、プラトーン集中に編入されたものである。テイラーはプラトーン著作集中の僞作とすべきものはすべて(2)に屬するものとする。即ちそれ等の作は大抵プラトーンの時代表者またはその直後の人々の手になつたものであつて、それが無名であるがために誤つてプラトーン集中に採り入

れられたと考へ、只「アルキビアデース第二」のみは例外でストア時代に書かれたとする。「プレトール」(二頁)然しアレキサンドリア時代には著作の偽造が盛んに行はれたのであつて(十二月號二九頁)贋作も亦ふくまれてゐると考へなければならぬ。テイラーの考へはグロートの傳承主義の現代的變貌といふべきであらう。

○「偽典」を眞作と認める者は古來一人もゐない様である。○「定義集」中の或るものはプラトーンの對話篇からの抜萃であるが、或るものはスペウシッポス的である。おそらくアカデミケルの手に成るものであらう。これを眞作と認める人もゐない様である。(テイラー「プレトール」十一頁ロバン「プラトーン」三〇頁參)○「アルキビアデース第二」「ヒツパルコス」「エラストイ」は(「エピノミス」と共に)古代人によつて偽作とされ(十二月號二二頁參)近代に於てもシユライエルマツヘル以來、傳承全體を承認するグロート等及びシユニエ(十二月號四六頁參)以外には何人によつても(「エピノミス」を除けば)眞作と認められてゐない。用語、内容上非プラトーン的である。○「テアゲース」「クレイトポーン」「ミノース」はシユライエルマツヘル以來、一般に(グロートを論外として)偽作とされてゐる。只「クレイトポーン」のみはヨエルによつて擁護された。ヨエルによれば、「クレイトポーン」はキユニコスのソークラテース觀(それはクセノポーンのソークラテース觀であり、プラトーンの眼には師の眞の姿を誤傳するものである)に對するプラトーンの論戰のよき證據である。(K. Joel: *Der echte und der Xenophontische Sokrates*. 1893-1901. ロバン「プラトーン」三〇頁註による)然し「クレイトポーン」はシユニエによつてさへ偽作とされた程、非プラトーン的である。私はヨエルの書物を未だ讀んでゐない。従つてヨエルの論據を知ることができない。今は通説に従つて暫らく偽作の部に入れておく。○「アルキビアデース第一」に對しては古代末期にオヌムピオドロス(六世紀

後半)の註釋(講義筆錄現存)があり、(その序説の一部分が「プラトーン傳」の名のもとに屢々出版さる。なほ後述「傳記資料論」參。)近代に於てもヘルマン等の支持あり、現代に於てもロバン等は眞作となす。就中その眞作性を熱心に主張してゐるのはパウ・フリードレンデルである。(P. Friedländer: Der grosse Alkibiades. I Ein Weg zu Platon. 1921. II Kritische Erläuterung. 1923.)用語、内容上非プラトーンの眞作は見出されず、プラトーン直弟子の作と看做すテイラーもソークラテース・プラトーンの道德論の原理を最もよく簡明に表してゐるとして、プラトーンの眞作を述べるに先立つて、その内容を展開してゐる(二六頁以下)。全體が小綺麗にまとも過ぎてゐる點が非プラトーンの考へられる。おそらくアカデミケルの一員が入門書として著したものであらう。

(二) 疑作 ○「大ヒッピアース」についてはヘルマン及びその系統の人々、現代に於てはテイラー、ロバン等の支持がある。テイラーはアリストテレスのトピカ(テイラーは幾度も引用または言及されてゐるとして、その箇所を上げてゐないが、おそらく *Topica* VI 7, 146 a 21; V 5, 135 a 12. 等を指してゐるのであらう)を證據としてゐるけれども、此等の箇所はアリストテレスの證言の(d)(十二月號三五頁參)に屬し、決定力は薄弱である。用語、内容に於ても非プラトーンの眞作が見出される (cf. Wilamowitz II S. 327)。なほ考ふべきであらう。○「ヒピニス」は上述の如く古代以來一般に僞作とされて來たのであるが、十九世紀に入るや、レーデル (Platon's Philos. Entw. 1905. S. 413 ff.)、テイラー (「プラトーン」一四頁以下及び四九八頁) ハーウオード (Epinomis of Plato. 1928.) に於て眞作とされ、シュテンツェル (Zahl n. Gestalt bei Platon n. Arist. 1924. S. 89-104. insb. 103, d.)、フヒテル (古代哲學史三二七頁) によつても眞作の可能性が主張されてゐる。然しイエーゲル及びその一統は猶僞作と

〕(Jaeger: Aristoteles 6 2. 146, 153 ff. Solmsen: Entw. d. Arist. Log. u. Rhet. 1929. S. 138 n 1) 就中々々ゲルの弟子ミューレルは綿密な文體研究 (Stilistische Untersuchung der Epinomis des Philippus von Opus. 1927.) によつて従來の偽作觀に嚴密な證據を提供した。ソルムゼンはこのミューレルの結論を決定的なものと看做してゐるが (Quellen u. Stuhl. z. Gesch. d. Mathem. i 105, 1929.) 然しテイラー (Plato and the authorship of Epinomis. 1930.) はこれに服せずミューレルの文體研究を一々反駁し、ミューレルの研究は「エピノミス」の偽作性を暗に前提してゐると評してゐる。テイラーはエピノミス篇の用語、文體上の缺陷はプラトーンの老衰と「法律」著作後の疲勞とに基因するといふ。また D・L (III 37) の上引 (十二月號四二頁) の言葉に續く「『エピノミス』も亦この人であると彼等は言つてゐる」といふ記録をテイラーはピリッポスが「法律」と「エピノミス」とを書寫したことを意味するにすぎないとする。

此の箇所は普通 'it is said that he was the author of the Epinomis' (Hicks. 1925.) と譯られ「『エピノミス』をピリッポス作とする典據とされてゐる。然し「此の人である」の「の」はテイラー流にも解し得られる。従つてこの記録は決定的な證據たる資格を失ひ、ミューレルの文體研究等が現はれる様になつたのである。テイラーが書寫の意味にとるべしとする直接の根據は古代に於て當篇の眞作性を疑つたプロクロスが D・L のこの記録を證據とせず、主として内的證據によつてゐるといふ點である。

テイラーの書物はミューレルの文體研究に對する反駁を主とし、眞作であることの積極的な證據を上げてゐない。アリステテレスの形而上學に於ける暗指 (1. 1073 b 6.) も (d) に屬し、果して「エピノミス」を指してゐるかどうか疑問である。ミューレルは偽作性を前提してその基礎付的研究に専念してゐるかも知れないが、我々より見れば

テイラーは眞作性を前提して論争的に反對論を論駁してゐる様におもはれる。「大ヒツピアース」についても「エビノミス」についてもテイラーの態度の脊後にはグロートの傳承主義がひそんでゐる。もし「エビノミス」がプラトンの眞作であるとすれば、プラトンの最終作となり、彼の晩年の數理哲學をうかがはしめる一重要資料となる。然し果して眞作なるか或ひは僞作なるか、遽に之を定めることが出来ない。姑く疑を存して置く。

(三) 眞作 ○「イオン」はシュライエルマツヘル等によつて疑はれたが、用語が所謂「ソークラテース的小對話篇」と異なる點については時順論によつて解決される。(次の(2)の(一)を見よ)。○「メネクセノス」については、ヴィラモウヴィッツ(II 136-137)の如く文字通りに眞面目にとるにせよ、テイラー(四一頁以下)の如く諷刺と解するにせよ、眞作と考へて差支へあるまいと思ふ。○「書簡集」については、「傳記資料論」に於て述べるのを便利としたが、今日「第七書簡」の眞作性を疑ふ者(従つて全書簡を疑ふ)はロバン(プラトーン三一頁以下)位のものであらう。

猶、「パルメニデース」「ソピステース」の眞作性は文體統計研究の結果殆んど確立され、之を疑ふ學者は現今では一人も見出されないが、然しさればと云つて決定的に眞作であるといふことはできない。僞作への方向よりは眞作への方向が強いと云ふまでであつて、パルメニデース篇後半の詭辯、ソピステース篇前半の煩瑣の如き、適當な説明的解釋が成立せぬ限り、非プラトニック的と考ふべきものである。「ソピステース」についてはアリストテレースの證言(Met. 1026 b 14; 1061 b 29.)があるが、それすら(e)に屬し、決定的とは云ひ難い。ヴィンデルバンドの疑作視は屢々嘲笑の對象とさるゝが、我々はむしろ彼の史感並びに藝術感の深さと鋭さとを反省の料として、此の兩篇の持

つ缺陷を救ふに足る解釋を下さなければならぬ。(私はヘーゲルの「パルメニデース」讚美「精神現象學ラッソン版四八頁」マクス・ヴントの新プラトーン派的解釋 [Platons Parmenides, 1935.] には服することができない。)

(2) 時順上の問題

(一) ソークラテース在世中に對話篇を書いたとする點。この點については確實な證據はない。D. I. III 35にプラトーンが「リユースイス」を読むのをソークラテースが聞いて云々といふ傳説が記されてゐるが、これは同書中に屢々散見する虚傳にすぎない。(後述「傳記資料論」參)。然し(1)プラトーンが哲學に志す以前に詩作を試みてゐたといふ事實からかく推定される。(Wilmowitz: I. S. 124-154. Stenzel: Platon der Erzieher. 1928. S. 83f. ホフマン・ロバン「プラトーン四〇頁以下」もヴィラモウヴィッツに従ふ。)(2)「イオーン」は「ラケース」「リユースイス」「カルミデース」等と用語が異なる。(Arnim: Sprachliche Forsch. z. Chronol. d. pl. Dialog. 1912. 234.) 然かも内容上幼く感じられる。(3)なほ私は此等の二篇(即ち「イオーン」「小ヒッピアース」)をプラトーンの哲學的出發に際しての自己批判の書と考へるのである。ソークラテース在世中にプラトーンが對話篇を書いたといふことは、ドイツではテンネマン以來一般の傳統であり、リッテル (Kerngedanken d. pl. Philos. 1931. S. 7. Arnim.; S. 35. Arnim.) も「小ヒッピアース」「ラケース」「プロタゴラス」「カルミデース」はソークラテースが告訴される前に書かれたとする。「アポロギア」を第一作とするプレヒテル「十二月號諸家時順表」、ポーレンツ等は勿論この點を否定する。英國ではグロート(第一卷二〇五—二一七頁)以來否定するのが傳統の様である。テイラー(二二頁)もさうである。この兩者の相違は英國では書簡集を眞作として、其處に見らるる若きプラトーンの政治的關心を重要視するに

對し、ドイツでは當初書簡集を僞作とし、「傳記」に傳へられ、その一部が現存する少年プラトーンの詩作を尊重することにともづく。(バーネット・テイラーはプラトーンの著作については傳承を重んずるが、「傳記」に對しては極めて嚴格である。蓋し「傳記」は傳承といふよりはむしろ傳説といふべきものを多くふくんでゐるからである。)

(一) 「プロクタゴラス」の位置。上掲諸家時順表に見らるゝ如くヴィラモーヴィッツ、ホフマン、ロバンは第三作として、ソークラテース在世中の作とし、プレヒテルも「イオーン」の次においてゐる。更にアルニムは當篇を以つてプラトーンの處女作とする。(Platos Jugendkluge usw. 1914. S. 1-37.) 彼等の據つて立つところは主として當篇は用語上「イオーン」に近似する(一)に引用せるアルニムの書同處)といふ點にあるのであらう。然しその藝術性、思想内容から見れば到底早期の作とは考へられない。テイラーは此の見地から諸家の通説に反對し、之を「パイドーン」「饗宴」と「國家」との間に位せしめる(「プレト」二三五頁。諸家時順表參)。然しそれはまた行き過ぎてゐると思ふ。「プロクタゴラス」の思想内容は諸徳の相關(徳の「一と多」)の問題と徳可教不可教の問題とをふくみ、而してこの兩問題は「ラケース」(勇)「リュースイス」(愛)「カルミデース」(愼)「エウテプローン」(虔)トラスヌマコス」(正)等に於て個々の徳目を順次に探求し來つた後に生れた問題であり、イデア論(一と多)認識論(可教知)の問題となつて「メノーン」以後に發展して行くと思ふべきであると信ずる。その中間にある「ゴルギアース」「メネクセノス」は當時のアテナイの情勢並びに之に對するプラトーンの態度から解明さるべきである。なほ「メノーン」が生れ出づるためには、數學的知識と新しき宗教思想とが「旅」によつて獲得され(兩者主としてピユタゴラス學徒より)、更にアカデメイアに於ける學園建立といふ劃期的事件が起つてゐなければならぬ。また用語上

よりの反對に對しては私はルトスワフスキーの文體統計に基く時順を以つて答とする。

(三) 「バイドロス」の位置。「プラトーンの對話篇のうち『バイドロス』程論争の的となつたものはない」(Thompson: *Phaedrus*, 1868. xiii.) と言はれ、また「それは「プラトーン」解釋の合言葉」(*Schibboleth der Platon-erfahrung*)である。「バイドロス篇の時順上、體系上の位置——バイドロス篇のディアレクティケーこそは此の最も謎に富んだ對話篇の最も紛糾した謎である。」(Stouzel: *Studien zur Entw. d. pl. Dialektik v. Sokr. bis Arist.* 1931, S. 53.) とも云はれてゐる。ウゼネルは「バイドロス」をプラトーンの著作的生涯の何處におくかによつて、此の思想家の内面史の全然異つた像が生れる、實際この對話篇の時期決定は「我々プラトニケルの諸群を區別する徵表」であると云つたさうである。(Riffort: *Phaedros* 1926, S. 6.) (1) シュライエルマッヘルの處女作説。彼曰く、哲學的衝動及び方法が哲學的素材よりはより内的であり、より強力である。「眞のフィロゾフィーレンは何か或る個別なるものを以つて始まるのではなく、全體の少くとも或る豫感を以て始まる。人間の人格的性格が然る如く、その考へ方、その世界觀の獨自なるものも亦、眞に自由にして獨立なるその表現の當初に於て既に現はれてゐなければならぬ。」(*Platons Werke I* 1^o S. 52.) D. L. III 37の傳ふる處女作説は「主題が子供らしい」といふ點を據所としてゐるもので、シュライエルマッヘルの如き深き哲學觀に根ざすものではない。(2) シュタルバウム(一八三二)ヘルマン(一八三九)は當篇をアカデメイア學園建立趣意書と看做した。(ツェラー、ルトスワフスキー、リツテル等による。) ウィンデルバンド(一八九三)も同く考へつゝある。(Platon, 1923, S. 31; 53.) (3) ナトルプ(一九〇二)は「バイドロス」にプラトーンの「始め」を見てゐる點に於てシュライエルマッヘルを賞讃したが、それは著作の始

めではなくして、「此の哲學者の全く獨自な、ゾークラティクを超えて進んで行つた、行動と探求との始元を示す」とした。(Platos Ideenlehre, S. 61.) (4) 然るに文體統計研究は當篇が「饗宴」「バイドーン」「國家」の後であり、「ソピステース」「ポリリーティコス」直前に位する「テアイテートス」「パルメニデース」と略々一群をなすべきものとした。(十二月號、四七頁以下) 然しながら「バイドロス」の思想内容たる(少くともその前半の)エロース、魂等はむしろ「饗宴」「バイドーン」等に類すると考へられる。かくして文體研究にも功績あるT・ゴムペルツは文體統計からの結論と思想内容との矛盾に苦しみ、つひに第二版説を提出した。さうしてツェラーによつて文體統計不信の材料とされたのであつた。(ツェラー五一五頁)。よつて學者は普通「國家」の後、「テアイテートス」または「パルメニデース」の前とし、(十二月號諸家時順表、參)「バイドロス」迄を前期説、「テアイテートス」または「パルメニデース」以後を後期説として區別した。これが文體統計研究勝利によつて獲得されたプラトーン觀である。人はたとへばバーネットの「ギリシヤ哲學」第一卷を開いて見るがよい。「國家」までが一章(XII)をなし、「テアイテートス」以後が五章(III—XVII)をなして此れにつづいてゐる。此の説き方は所謂バーネット・テイラー説に基くものでまた別に理由のあることであるが、一體「バイドロス」はどうなつたのか。或ひはXIIに入り、或ひは最後のXVIIに入つてゐる。まさに「バイドロス」こそはリッテル・シュテンツェルの言葉の如く、まことに「プラトーン解釋のシボレート」である。

「バイドロス」を老年期の始めにおくことに對しては多くの異論があらう。然し(1)文體研究の上から見ても、このことは決して無理なことではない。むしろ當然といふべきである。何故ならば「ソピステース」以後の著作の文體上の共通特徴とされる、抑揚の均衡、詩人及び早期文學から豊かにされた語彙、*το ὄντι* の代りに *ὄντως* が *ὄντων*

is の代りに *ἄλλο ὅτι* が用ゐられてゐること、Hicinus の比較的僅少なごと、イオニック與格複數、等がすべて「パイドロス」に見出され、而して以上の諸點は普通イソクラテースの影響による文飾と考へられてゐるが、當篇の終りにイソクラテースの讚美を讀むことができる。更にイソクラテース讚美のほかにヒッポクラテース讚美(二七〇c)が見出されるが、生理的狀態に關する *Boisye* 等の十二語が「パイドロス」及び「テイマイオス」に於てのみ見出される。(cf. Campbell: On the position of the Soph. Politic. a. Phil. in the order of the Pl. dialog.; and some characteristics of Plato's latest writings. 1890 in Jowett a. Campbell: *Republic II* p. 46-66.) 従つて「パイドロス」を「ソピステース」の直前におくことは文體上から見て決して無理ではないのみならず、むしろさうする方が自然であると考へられる。文體統計家が此の篇を「テアイテートス」「パルメニデース」の前におくのは、單に文體統計の上からではなく、むしろ思想内容の上からであると云はねばならぬ。然し(2)「パイドロス」の前半の魂不死の證明は「パイドーン」「國家」のそれとは全然別箇のものであり、その「自動性」による證明は「法律」(八九四b以下)に見らるゝものと全く同じものである。(従つてバーネットは「法律」と同章で説いてゐる。) 而して當篇の前半は「パイドーン」のアナムネーシス、「饗宴」のエロース、「國家」の魂三部説の綜合である。更にその後半に説かるゝディアレクティケーの一部をなす分割法(二六五e以下、二七七b以下)は「ソピステース」「ポリテイコス」「ピレーボス」にのみ見出さるゝものである。さうしてシュテンツェル以來よく問題にされる「不可分形相」なる概念は「ソピステース」(二二九d5) 以外には當篇(277 b *τὰ ἀντίποιν*) に見出されるのである。従つてシュテンツェルも當篇を「ポリテイコス」「ソピステース」「ピレーボス」等に述べられてゐる方法をプラトーンが意識して用ゐ

てゐた時に書けたものと看做し、このことは疑を容れなうとしてゐる。(Entwickl. S. 108 n. 1) アルニムは更に當篇の「エレアのパラメデス」(三六一d)は「バルメニデース」を豫想してのみ解し得らるるとし、其他猶多くの箇所を檢討して(Plat. Jug. u. die Entstehungszeit des Phaidros, S. 155-224)「パイドロス」を老年期の始めの書(即ち「テアイテトス」「バルメニデース」の後)と看做しつゝゐる。(op. cit. S. IV; S. 156.) なほフリードレンデルも我々と同位置におゝてゐるが(Platon II Philosophische Schriften, 1930, S. 485-504)その理由は詳かでない。更にイソクラテース讚美は單に晩年の文體といふ様な外面的なことのみ關はるのではない。プラトーンの第二回シラクサ行は、ディオーンの懇請に理想國家建設の機縁を見出したといふことと共に、シラクサを中心とする堅固なる國家群の形成によつて當時古代世界全體の脅威であつたカルタゴからギリシヤ世界の文化を救はんとするにあつた。(第七書簡三三三aテイラー七頁參)さうしてイソクラテースは文章家として立ち、その學院は人文主義を基礎とするに對し、プラトーンは哲學者として立ち、アカデメイア學園は哲學的諸科學を基礎としてゐるといふ點に、相違があるにせよ、共に汎ヘレニストとしてギリシヤ世界の將來を憂へる點に於ては同じであつた。第二回シラクサ行直後に書かれた「パイドロス」のなかにイソクラテース讚美が見出さるゝのは當然と言はねばならぬ。

「パイドロス」をプラトーン老年期の第一作とすることは、然しながら、我々のプラトーン觀に對して重大な意義をもつ。「パイドロス」の前半には、ソクラテースの「エントウシアスモス」に基因するかの如き表現上の技巧があるとはいへ、イデアの超越性、直觀性、形而上性が最も闡明に現はれてゐる。然るに後半に於ては「ソピステース」に於けるが如く論理的存在論的である。かゝる所謂前期的なるものと後期的なるもの、藝術性宗教性と論理分析とが

同時存在してゐる點に「パイドロス」のプラトーン全對話篇に占める獨自性があるのであり、此の對話篇が普通前期思想の批判をふくむと解せられてゐる「バルメニデース」篇の後に位することによつて前期後期の峻別は解消する。それ故にこそ、此處にシュライエルマツヘルはこの哲人の始元的全體を感得して處女作となし、ウインデルバンド等はアカデミーア學園建立趣意書とし、ナトルプはプラトーン哲學出發の書と見たのである。此處にプラトーンの全人格が現出し、所謂前期も後期もふくまれてゐる。

かく言ふももとより「パイドロス」にプラトーン哲學の最高峰乃至その中核が示されてゐるといふのではない。プラトーン哲學の中心概念は善のイデアである。光の根源、無假定的者としての超有たる善のイデアはプラトーン哲學の始めにして終りである。この意味に於て、善のイデアを語る國家篇がプラトーンの主著であり、我々の研究の核心をなすのである。

文體統計研究に狂喜して後期プラトーン哲學を一方的に讚美せるは前世紀の古典的解釋に對する一種の反動にすぎない。プラトーン哲學に發展が無いといふのではない。然し「辯明」に始まり「國家」に於て殆んど天空を摩したプラトーン哲學の根本精神は最後まで否定さるゝことなく貫かれてゐる。それは否定そのものを自己の本質としてふくむ超有に根ざす理想主義的精神であるからである。二元的緊張はたるむことなく何處までも進み行く。所謂後期哲學——内在論的、混合論的存在論を一方的に讚美する人々の書には「ピレーボス」「ティーマイオス」篇中のウシア（またはオン）とゲネシスとの對立（この對立は結局超有と非有——プラトーン自身の言葉を用ゐれば場所——との二元的緊張に歸着する）を説く箇所が引用されてゐない（「ピレーボス」五九_a、「ティーマイオス」二七—二八）。「法律」に於ても

「國家」の原理は否定されてゐない。只その原理の適用に對してより慎重により現實的になつたのみである。却つて「法律」は「國家」の光によつて始めてその意味を見出すのである。そこに變化すると共に變化せざる永遠のプラトーン、發展に相即する不動の哲學的精神が生きてゐるといはなければならぬ。「パイドロス」老年期説については近刊拙譯「パイドロス」の解説にもう少し詳しく述べる。

上掲諸家時順表並びにプラトーン著作年表に於て略々同位置を占めてゐる對話篇についても猶異論がある。そのうち著しきものは、「リュウシイス」と「クラテュロス」である。「リュウシイス」はその思想内容上「饗宴」と類似するといふ理由(文體上の證據も無いわけではないが)に基きリツナル(Kernged. S. 77) ボーレンツ(Aus Platos Werdezeit. 1913. 358 ff.)等によつて「饗宴」直前の作とされ、レーチル(154-158)によつて「饗宴」の衛星、チャーミデス(Charmides, Lysis. 1922. S. 73.)によつて「饗宴」以後の作とされた。然し「リュウシイス」ハ青年プラトーンが個々の徳目の徹底的研究を目指してゐた頃の諸著作の一つであり、「カルミデース」の姉妹篇であることには疑の餘地は無いと思ふ(アルニム同上書三七七一頁参照)。「饗宴」と内容上類似すると云ふ點については「リュウシイス」篇はプラトーンの初期著作の段階に於ける哲學的エロース論を示してゐる。(フリードレンデル同上書一〇二頁)と考ふべきである。

「クラテュロス」が「エウテュデモス」と略々同時代の作であることは諸家の通説であるが、之に對してゾールブルグはアルニムの文體研究を批判し、「テアイテトス」との近似を主要根據として四世紀の六十年代に移すべしと主張してゐる。(Max Warburg: Zwei Fragen zum "Kratylos". 1929. S. 31-61.) 然し氏の文體統計反駁は成功してゐるであらうか。また「テアイテトス」との類似も部分的であつて、一篇全體の位置を動かすに足り無い。

(七) 著作と口述

(1) 著作の資料的價值

私は上來プラトーンの著作の時順は大體に於てプラトーンに於ける哲學的精神の發展を現はすものとして論述して來た。然し果して著作の時順はプラトーン哲學の發展の順序と云へるであらうか。たとへばカント哲學について「カントの著作の時間的順序は大體に於て同時に內的・當體的順序である。即ちカント哲學の漸次的成立と形成とに於けるその生成である。」(五・フィッシャー)と云はれてゐる如くに。此の兩順序の關係については從來シュライエルマツヘルの教育的順序觀とヘルマンの時順即精神的發展觀との對立がある。シュライエルマツヘルは、人々がプラトーン個々の對話篇の内的生命を無視し、任意の箇所を拾集してプラトーン哲學の體系を捏造せんと試むるに對し、各對話篇間の自然的聯關を探索した。彼の此の出發點はすぐれてゐる。然しその自然的聯關として得られた著作の時間的順序は彼の云ふが如くに他人を教育せんがための順序であらうか。その主張が無理であることは彼自身多くの對話篇を「傍^{ネムレン}作」として順序外に置かねばならなかつたことから容易に知ることができる。彼の優れた解釋學的感覺は僞疑作を十二篇に止め、他を傍作として救ふことができたけれども、その時のない時順觀(教育的計畫にもとづく著作順は時順と稱しても實は空間にすぎない)は終にアストに至つて二十一篇の僞作を生み出した。(十二月號三九頁及び四五頁參)。發展を拒否するならば斯くの如き事態は當然避けることができない。然し私はこの點については四の後半に於て已に述べた。従つてシュライエルマツヘル流の立場は最早問題にする必要はない。然らば著作の時順は内の當體的順序と云へるであらうか。これに對してはイェーゲルのアリストテレス研究に基くホフマン(ツエラー哲學史補説)プラトーン哲學の「發展」と「體系」との問題)の反對がある。彼はイェーゲルの次の如き考へに立脚し

てゐる。イエーゲルによれば、プラトーンの對話篇は自然哲學者のイオニア的ロゴスではなく、ダイモヒアイ靈感による藝術品である。プラトーンの學說を知るには學内に於ける講義によらなければならぬ。アリストテレースはプラトーンの教育説や社會哲學説を述べる時には對話篇を引いてゐるが、イデア論を述べる際には殆んどそれに訴へてゐない。プラトーンの學說を知るにはアリストテレースに依らなければならぬ。對話篇からイデア論を知らうとするのは彌縫策にすぎない。(Jaeger: *Socratic Studies*)。もしもかくの如き考へが成立するならば、それは單に兩順序間の並行を否定するに止らず、プラトーン哲學の資料そのものに拘はり、プラトーンの著作の(プラトーン哲學を知るための)資料的價值そのものの否定となる。著作と講義との峻別は、然しながら、必ずしも新しい考へではない。その萌芽は已に古代末期の「テラテリツシユ秘教的」と「エクリテリツシユ顯教的」との對立に見られる。然しそれは近代プラトーン研究の當初に於てシュライエルマツヘルによつて否認された(Iris Stof)。シュライエルマツヘル後ヘルマンは殆んどイエーゲルの考へに近い主張を爲してゐる。即ち「プラトーンの學說の核心は彼の著作のなかには書きおろされなかつた。彼の著作活動は自分の體系を有機的に根拠付け發展せしめるといふ目的を持つてゐない。……彼はその哲學の最高原理、超感性的イデア説には、著作のなかでは、暗示的に或ひは事の序でに觸れたにすぎない。この對象はむしろ講義に留保された。」(ツェラー四八四頁註三による)。イエーゲルの主張はかゝる系統の現代的再生である。現代的といふのはその背後には周到なアリストテレース研究が控へてゐるからである。然しイエーゲルの主張する如き理由によつてプラトーンの對話篇のプラトーン哲學に對する資料的價值を否認することができるであらうか。

プラトーンの對話篇が藝術作品であつて、彼の哲學を示すものではないといふ説には、一般にプラトーン哲學の藝

術性乃至そのミュートスを彼の哲學に對して外面的なものと非本質的なものにすぎないとする豫想が潛んでゐる。然し(1)プラトーンの哲學思索並びにその教育法と對話篇といふ形式とは必然的聯關を爲してゐる。「對話」といふ形式は藝術上の表現形態であるが、それが同時に彼の哲學する仕方であり、また教育の方法でもあつた。おそらく「講義」と稱せらるゝものも多く對話の形式を取つてゐたのではなからうか。(この點については後に稍、詳しく觸れる機會がある。私がこの節の表題を「著作と講義」とせずして口述としたのは對話をも含ましめんがためである。)(2)プラトーン其の人の根本特徴である詩人的性格は同時に彼の哲學の根本性格の一つでもある。彼は哲學への道に出發すると同時に少年時代の詩作を燒却し(後述「傳記資料論」參)「イオーン」篇に於てその自己批判を試みてゐる。さうして彼自身は藝術に對してはあまり多くの價値を置かなかつたが、然し彼の詩人的天賦はそのため却つて彼の哲學そのもののなかに浸透し、かくして至西洋哲學史を通じておそらくは第一の藝術的哲學作品を遺したのである。藝術品であるが故にその哲學を表はしてゐないのではなく、却つて藝術品であるが故にその哲學をよく表はし得たと云ふべきである。最近のプラトーン研究は後期著作の一方的讚美とアリストテレスよりプラトーンを見ることの結果として、プラトーン哲學の藝術性を極端に排斥し、之を過去のプラトーン觀の殘骸として輕蔑する傾きがあるが、「ディオマイオス」「ピレーボス」の如き、年を経し大樹をおもはしむる壯嚴な美しさに充ちてゐる。アリストテレスのプラトーン敘述については後述する。(3)プラトーンの對話篇中特に藝術的としてその資料的價値を疑はるゝ部分はそのミュートスであらう。然しミュートスはプラトーン哲學そのものの本質的要素である。ミュートスは藝術品として一般社會に現はれ、ロゴスは哲學として學内に説かるゝとするが如きはプラトーン哲學を知らざる者の癡言であ

る。プラトーンのみニユートスは一律に説くことができな。然し之を大別するならばロゴスを超ゆる世界を象徴的に現はしてゐるもの、ロゴス以下の蓋然的事象を現はしてゐるもの、ロゴスを以つて説き得るもの、或ひは對機説法（對話篇中の人物に對して）のため或ひは全篇の表現構造のため或ひは比喩的簡潔のために用ゐられてゐるもの、となすことができよう。就中重要なものは超ロゴス的のみニユートスである。魂の故郷、超有の働き等はこれに屬する。此等ののみニユートスはプラトーン哲學の不可欠的徴表である。

更に著作と學内講義との對立は絶對的であらうか。「テアイテトス」篇の冒頭には、極めて狭い範圍内で對話篇が朗讀されてゐたことが記されてゐる。プラトーンの著作は一般社會の讀者を旨指すと共に自分の周圍の人々或ひは他の學者思想家たちを旨指してゐたのであらう。むしろ却つて後者がその讀者ではなかつたか。今日猶いろ／＼に論争されてゐる對話篇が、學内の論議を親しく知つてゐない限り、當代の哲學的教養ある人々によつてさへ充分に解し得られたかどうか、甚だ疑しいと云はねばならぬ。(cf. D.-Pr. S. ara.)

以上の理由によつて、私はプラトーンの著作がプラトーン哲學を知るための資料として充分な價值を有してゐないと云ふイェーゲルの主張には速かに讃同することができない。ホフマンはイェーゲルの著作と講義との峻別に讃しながら、アリストテレスを根本資料とするイェーゲルの取つた道とは岐れ、對話篇は機會原因によつて狭く限られてをり、然もプラトーンの講義は殘存してゐないのであるから、我々はプラトーン哲學の發展ではなく、むしろ個々の對話篇の背後にある不變的なものを見透して、その「體系」を見出すべきであるとする。我々はもとより發展の背後にある不變的なものを否定する者ではない。然しそれはあくまでも發展に即して觀得さるべきもので、時間を無視

し、個々の對話篇の有機的關係から思想の斷片を抽出して固定的に構成された體系であつてはならない。對話篇がプラトーンの哲學を示すものであることは先に論述した如くである。プラトーンの著作は資料的價値を充分に有する。然しながらこのことはアリストテレスの關説に對して資料的價値を拒むことを意味しない。ホフマンは「プラトーンの講義」は殘存してゐないとして斷念してゐるに對し、イエーゲルは此れを「アリストテレス」において見得るとする。茲に兩者の岐路がある。我々はアリストテレスの關説に對して如何なる態度を取るべきであらうか。著作が資料的價値を有することは確定したとしても、アリストテレスの關説の方がより重要な資料であるかも知れないではないか。更に、アリストテレスはプラトーンの教育説、社會哲學説を述べる時には對話篇を引くが、イデア論を述べる際には殆んどそれに訴へてゐない、といふ主張については如何に考ふべきであらうか。然し私は先づその準備としてアリストテレスの關説の大略を知らなければならぬ。

(2) アリストテレス派のプラトーン關説

アリストテレスによつてプラトーン説として述べられてゐるものがプラトーンの著作と大體に於て一致してゐる場合には問題は生じない。兩者が一致しない場合があるが故に、問題となるのである。さてアリストテレスの關説は凡そ次の五群に分つことができよう。(1) プラトーンの著作を引いて論じてゐる箇所、(明かに著作名を上げてゐぬ場合でも著作を指してゐると考へらるゝ箇所は之に屬する)。(2) 形而上學に於ける體系的敘述(A卷六章)。(3) 「不文の教説」(Plys. IV 2. 209 b 14)。「哲學に關する口述」(εὐ τοῦς περὶ γενεαλογίας λεγόμενος) (De Anima. A 2. 404 b 19)によるとア氏自身明言するもの、(4) プラトーンの名を擧げて述べてゐるが、プラトーンの著作には見

出されない言葉、例へば形而上學M卷八章一〇八三a三三。(5) プラトーンの名を明示してゐぬが、諸家によつてプラトーン説の敘述及び批判とせらるゝもの、形而上學A卷九章M卷四章五章七章の如き。(1)については、A氏の引用してゐる著作は全部現存してゐるから、資料としての新しい寄與を供しない。然しこの一群はアリストテレスの關説の資料的價値を検討するにあつて、有力な手懸となるものである。我々は次節に於て之を問題とするであらう。

(2)乃至(5)がおそらくプラトーンの著作には見出されぬ新しき資料を含んでゐるのであらう。然るに此等全體に互つてアリストテレスに由るプラトーン説を形成し、その一々の箇所についてその資料的價値を検討することは極めて困難な、殆んど不可能に近い仕事に屬する。然しそれは我々の當面の課題ではない。我々の課題はアリストテレスの關説が大體に於て如何なる性質のものであるかを見、プラトーン哲學を研究するに際し、それに對して如何なる態度を取るべきかを豫め暫定的に定めておくことにある。我々は先づ(2)の形而上學に於ける體系的敘述を見よう。

(一) 形而上學に於ける體系的敘述。A卷六章は僅かにロスの原文の二頁を占むるにすぎない短文であるが、我々にとつては極めて重要である。何故ならばそれは(1)アリストテレス自身によつてプラトーン説と明言さるゝ(2)體系的(3)敘述であるからである。即ちそれは(1)後世のアリストテレス學者によつてプラトーンを指すとせらるゝもの(前述の第(3)群)とも、(2)アリストテレスによつてプラトーンの言葉と明言さるゝも斷片にすぎないもの(前述第(4)群)とも、(3)敘述ではなく批判を直指してゐるもの(A卷九章)とも異つてゐる(A卷六章も少しく批判をふくむが)。A卷六章はプラトーン説の起源と體系的敘述とをふくむ。起源は目下の我々には不必要であるが、「プラトーンに於ける哲學的精神の發展」を辿らんとする我々の研究には不可缺の資料であるが故に、之もこの機會に共に

見ておくことにしよう。(原文はロスに據つたが、唯彼が寫本から削除した [ἀφ' εἰσέν] (Gillespie) [ἀφ' εἰς] (Zeller) は寫本を尊重する意味に於て生かすことにした。前者は文法上無理であるが、證明的屬格として見ることは全然不可能とも云はれまい。後者は寫本のまゝでよみうる。)

プラトーンの仕事は大體に於てピュタゴラス學派に隨つてゐる。然し彼等の哲學とは異なる獨自な點もある。それは他の二方面からの影響による。一、彼は若い時に先づ、感覺されるものはすべて常に流轉しそれについては知識は成立しない、といふクラテュロス・ヘーラクレイトス説に親しみ、後年に至つてもかく考へてゐた。二、然るに他方ソークラテースは自然全體については少しも研究せず、人倫について考究し、この領域に於て普遍的者を探究して始めて定義に専心したのであつたが、プラトーンは此のソークラテースの考へをも承認した。しかもかういふこと(普遍的者の定義)は感覺されるものについては不可能なことであつて、それとは別なものについて成立することであらうと考へた。その理由は感覺されるものは常に變化してゐるから、その共通的定義といふやうなものはあり得ないといふにある。かくしてプラトーンは事物のうち、さういふ感覺されるものとは異なるものをイデアと呼んだ。さうして感覺されるものはすべてイデアに準じてまたそれに從つて名付けられるとした。イデアと同名の雜多なものはイデアへの關與によつて存在するからである。(ピタゴラス學派は模倣と稱し、プラトーンは關與と稱してゐるが、それは單に名稱の變化に止まる。然し「關與」或ひは「模倣」とは何であるかについては、彼等はそれを問題として残した。)

* 「準じて」は原文 *κατὰ ταύτην καὶ κατὰ ταύτην λέγονται* である *κατὰ* の、辭典にも載つてゐる普通の用法の一つに從つて譯してみた、假譯である。此文をロスは英譯の初版(一九〇八)では 'were apart from these, and were called after these' と譯

したが、註釋(一九二四)では言語學上の用法を證據として、'were called after these and were called what they were called by virtue of their relation to these'とする方が自然であるとした。ロエプ文庫譯(一九三二)大體之に従ふ。シユエマンソン(Zahl u. Gestalt. 1924. S. 2.)は已ランツラー(Pl. Stud. 1839. S. 226.)に見え、'neben'を用ゐてゐる。田中(美)氏は「副いて」としてゐる。「理想」六九號三七頁)。

更に感覺されるものと形相ネイドレスとの外ほかに、兩者の中間に位する數學的者(算術の對象なる數、幾何學の對象なる圖形)がある。それは一方、永遠不動である點に於て、感覺されるものとは異り、他方、多くの等しいものがある點に於て、各、獨自なものである形相とは異つてゐる。

以上A卷六章の前半のうち、プラトーン説の起源に關するものは彼の二十年に互るアカデーミア學園生活をおもふ時、相當に信用してもよいものと考へられる。然し今はそれについて考ふべき時ではない。それは他の傳記資料並びに著作の時順と併せ考ふべきものである。當面の問題はその體系的敘述である。

此の體系的敘述の前半はプラトーンネイドレスの著作に見らるゝ思想と大體に於て一致すると云へる。(全く同一であるか否かは問題としても)。然るに後半(九八七b一九以下)はプラトーンネイドレスの著作に明かには見出しえないものをふくんでゐる。この前半、後半の區別は(5)に屬するM卷四章の初めにある次の言葉によつて明瞭である。「さて、イデアについては、先づイデア説そのものを少しも數の本性には結び付けずに、始めてイデアの存在を主張した人々が初めに考へてゐた通りに、考察しなければならない」之によつて見ればイデア説には數と關係ない初めの相と數と結びついた後の相とがあることになる。「始めてイデアの存在を主張した人々」はそれにつづくイデア説起源の敘述とA卷六章の

敘述とが殆んど全く符合してゐる點から見てプラトーン並びにその派の人々を指すことは明かである。(ロス四二〇—二一頁)。バーネットはプラトーンを指してゐるとなさず、ソピステース篇の「イデアの友」を指すとし、而してその「イデアの友」をプロク羅斯を典據として、後期ピュタゴラス學徒と看做してゐる。(G. Ph. I. p. 313; 280)。「テイラーも初めはメガラ學徒をさすとしてゐたが」(Varia Socratica. 1911. 81-89)後バーネットに同じた。(プレトール、三八六頁)。従つてバーネット等にとつては「アリストテレースは形相を數と同一視する唯一つのプラトーン哲學について知つてゐるのみである。彼は此のプラトーン哲學が形相を數と同一視しない初期プラトニズムに取つて代つたといふことを少しも指示してゐない。それは近代の推量にすぎない」(バーネット同書三一—三頁)といふことになる。かくしてプラトーンの著作は彼等にとつても亦、プラトーン哲學の根本資料ではなくなる。然しA巻とM巻との符合は動かすことはできない。

A巻はアリストテレースが未だプラトニコスであつた前三四八—三四五年頃、アッソスでヘルミアスの周圍に集つたプラトニコイの前で朗讀されたものであり (Ross: xxii; vol. I 190. Jaeger: Stud. 34 n. 6)。「M巻の上述の部分はそれはるか後に成つたものである」(Ross: xxi; vol. I 190f; vol. II 405 f.)とすれば前者ではプラトーンと云ひ、後者ではよそよそしく「始めにイデアの存在を主張した人々」と稱してゐる表現上の相違は、同じことの時によつて異なる變貌であると解することができぬ。

それではA巻六章の後半はプラトーン説として如何なることを語つてゐるか。形相は他のものの原因であるから、形相の要素がすべての事物の要素であるとプラトーンは考へた。それで質料としては「大而小」が原理であり、ウ

シアとしては「一」が原理である。何故ならば「一」に關與することによつて、「大而小」から形相が數として成立するからである。(即ちイデアそのものが「一」と「大而小」を要素とする數なのである。然るにイデアの要素がすべてのももの要素であるが故に、一切は「一」と「大而小」から成ることになる。) しかして「一」はウシアであつて他の何かの述語ではない。また數は他の事物のウシアの原因である。此の二點はピュタゴラス學徒と同じである。然し無限定なものを大と小とから成るとし、それを一つとせず「二」としたことはプラトーンに獨自な點である。また數が感覺されるものの外にあり、數學の對象がイデアと感覺されるものとの中間に位するとする考へも彼獨自のものである。さうしてプラトーンが「一」と「數」とを感覺されるものの外においたことまたイデアを導入したことはその言論についての研究に基因する。(初期の學者たちはディアレクテイケーには關らなかつたから)。更に「一」の外に「二」を別な本性ヒュシシスとしたのは、「一」のほかに「大而小」を別箇の原理としたのは、素數素數以外の數が「二」から、丁度印材からの様に、容易に産まれるからである。

* 「素數」といふ譯語が今日の數學の素數の意味にのみ解されるならば、むしろ文字通り第一數と譯すべきかも知れない。この「プロトイ」が如何なる數を意味するかについては、アレキサンドロス以來さまざまの異説がある。ロスの此の箇所の註によれば、「奇數」(アレキサンドロス)、素數一般(今日のいみの)(同上)、イデア數(トレンデレンブルグ、シュウエグラール)、「ロスは上げてゐぬがツェラーも之れに屬す」、「プラトン研究」二五五頁)、イデア(ジャクソン、これはイデア數と同じことになる)一及び「二」(テイラー)、アリストテレスの誤解(ロス)。シュテンツェルは「ディアイレシス」の立場から數の生産を見、プラトーンにとつてはすべての數が「ディアイレシス」によつて生産される、従つて「プロトイを除いて」はアリストテレスの立場からの批判的附加であるとする(N. E. S. S.). トエプリッツはエウクレイデースに於ては今日の素數の意味のほ

かに、互に約される二つの数は「互に他に對してプロトス」と名付けられてゐることを證據として、「約された對」を意味するとした。即ち「約された對」に約さるべき總ての對（即ち比）は「約された對」といふ。「一」によつて「大而小」の無限定な印材から産出される。（Toeplitz: Das Verhältniss von Mathem. u. Ideenlehre bei Plato. 1939. Quell. u. Stud. z. Gesch. d. Math. Abt. I. Bd. 1, S. 22.）おそくハトキプリッツの考が正しいであらうが、このアリストテレスの敘述を直ちにプラトーン説となしうるや否や、我々が問題にしてゐるのはこの點である。

上述の文の次にアリストテレスの批判が少しく続き、最後に總括ともいふべきものがある。

プラトーンは我々の探求してゐる問題（即ち原因）について以上の様に規定した。其處からして、彼が二つの原因しか用ゐなかつたことは明かである。即ち「何であるか」（本質）の原因と質料因と。形相は他のものの、「一」は形相の、本質の原因であるから。下に横る（基體的）原因（感覺されるものに於ては形相がそれについて語られ、形相に於ては「一」がそれについて語られる——述語される）は「二」即「大と小」である。更にプラトーンは此等の要素に善因、悪因を歸した。

以上のアリストテレスの敘述——就中イデア數説——にはプラトーン自身の著作に明かには見出されないものが含まれてゐる。「テイーマイオス」「ピレーボス」にしても上述の如き相では現れてゐない。この差異はプラトーン自身に由來するか、それともアリストテレスに由來するか。プラトーン自身に由來するとするならば、それはプラトーン哲學の變貌を意味すると共に、イエーゲルがプラトーン哲學の根本資料となすべしとした「講義」に基づく考へなければならぬ。プラトーンの講義といふことは何を典據として云はるゝか。

(二) 「不文の教説」「講義」アリストテレスは自然學四卷二章（二〇九b一四）に於てプラトーンの「不文の教説」

に言及し、プラトーンは「ティーマイオス」では受けとるもの又は場所と呼んだものを「不文の教説」では「より大—より小」と言つたと告げてゐる。更に心理學一卷二章（四〇四b—一九以下）に「哲學に關する口述」によるプラトーン説が述べられてゐる。即ちプラトーンはその口述に於て、生物自體を「一」のイデアと第一の長さ・幅・深さとから成るとし、又ヌースは「一」、「知識」は「二」、「ドクサは平面の數、感覺は立體の數であるとした。更に數は實際、形相そのものであり原理であるが要素から成立つてゐる。事物は或ひはヌースによつて或ひは知識、或ひはドクサ、或ひは感覺によつて判ぜられる。然るに數が此等の事物の形相である。そこで、魂が運動すると同時に認識するものであると思はれる以上、魂は兩者からなり、魂は自己自身を動かす數となる。アリストテレースは「等しきものは等しきものによつて知られる」といふ説の一例證として之を述べてゐるのである。即ち事物の構成要素たる數が同時に魂の要素であるといふ説を報告してゐるのである。さて上述の「不文の教説」を自然學の註釋家シンプリキオス（五四九死）は「善についての講義」であるとし、この講義はアリストテレース及び其他の弟子によつて筆録されたと云つてゐる。（ロス、一七〇頁による）。然るに此の講義については已にアリストテレースの直弟子アリストクセノスの報告がある。彼はアリストテレースが何時も物語つてゐたこととしてプラトーンから善についての講義を聞いた大部分の人々の受けた印象について語つてゐる。即ち人々は何か人間的な善を聞けるつもりで集つた。所が話は數學や數や幾何學や星學に關するものであり、「限定」は一つの善であるといふ様なことであつたので、全く意外の感に打れた。（原文はツェラー七一二頁註三を見よ。）（猶ロバン「プラトーン」一四六頁参照）。かくして上述のアリストテレースの形而上學A卷六章後半の敘述はプラトーンの講義にもとづくものであることが推定される。さうして、始めに分類したア

リストテレーヌの關説の第(4)も之にもとづき、即ち例へば「『數』は互ひに加へられることができぬ」といふ形而上學一〇八三b三四の報告は講義に由來すると考へられる。この第(4)群は僅少である。第(5)群は諸家によつてプラトーンを指すものとせられ、重要資料とされてゐる。然しプラトーンの名が擧げられてゐないもの故、當時のアカデミケルの所説も混入してゐると考へられなければならない。

然るにプラトーンの講義についてはなほリストテレーヌ註釋家の所傳がある。然るに「アリストテレーヌ希臘註釋」は二十三卷五十一部に互る厯大なる資料であり、今の私には見ることでないものである。否たとひ手に取りうるにしても、それがプラトーン哲學の根本資料を含むとの確信もしくは豫想なくしては、其の研究に進むことは不可能と云はなければならないものである。今は泰西諸家の探索の結果にもとづいて、その資料的價値の程度性を定めるための準備として、それ等註釋家の人名、年代並びに報告の大略を考へておくに止める。「プラトーンの講義」について語つてゐるアリストテレーヌ註釋家はアレクサンドロス(二二一死) テミステイオス(三二〇—三九〇頃) シンプリキオス(五四九死) ピロポノス(六世紀頃?) の四人であり、その報告によれば、上引(六六頁)の如くこの講義はアリストテレーヌ始め、シペウシツポス、クセノクラテリス、ヘルモドーロス等のアカデミケルによつて筆録された。その内容の核心は「一と不定な二(これをプラトーンは「大而小」と呼んでゐたが)とは、すべてのもの、イデアのさへ、原理である」といふことであり、我々が已に見たアリストテレーヌの敘述に見らるゝものに等し *S. o. (cf. Hoepflich: op. cit. S. 19.)*

然らばプラトーンの講義にもとづくと考へらるゝアリストテレーヌ、その弟子、及び註釋家たちの報告は如何なる

程度の資料的價值を有つと考ふべきであらうか。イエーゲルのいふ如く著作を凌駕する根本資料と考ふべきであらうか。

(3) その資料的價值

プラトーンの講義と稱せらるゝものに原稿があつたか否かは不明である。おそらく原稿は無かつたのであらう。古人は之については何ごとも語つてゐない。またアリストテレス等が作つたとアリストテレス註釋家たちによつて語られてゐる筆録も傳はつてゐない。従つて我々はアリストテレス等の報告が果してプラトーンの眞意を傳へるものであるか否かを檢すべき確實な手懸を有しない。然らば如何にして我々はその資料的價值を檢すべきであらうか。それには、ツェラーが *Die Darstellung d. Platonischen Philosophie bei Aristoteles*. (*Platonische Studien*, II) に於て採用した方法即ちアリストテレスが明かにプラトーンの著作をあげてゐる箇所について、アリストテレスのプラトーン敘述の性格を考察し、それによつて、講義にもとづくと考へらるゝ報告の資料的價值を檢すべき基準を獲得するといふ方法が効果的であると思ふ。即ち前掲アリストテレスの關説の第(1)群に屬する箇所の性格が明かにされなければならない。此の場合に於てはプラトーンの著作といふ確實な檢討手段があり、「我々には知られてゐない資料に基いて」といふ迷途は切斷されてゐる。然るに其の際次の如き四つの缺點が見出される。先づ(1) アリストテレスの注意は個々の結論に向けられ、全體との聯關に於て考察されてゐない。たとへば「國家」の妻子財の共有の思想はプラトーンの理想主義との聯關によつて始めて意味を有つものであるに拘らず、アリストテレスは (*Polit. II, 5*) 之を全體から引き離して單にその實行の可能不可能といふ見地からのみを眺めてゐる。また(2)

プラトーンにあつては理想的な意味を持つ表現が經驗的な意味にとられてゐる。たとへば「國家」の第八・九卷に説かれてゐる諸國家の變轉順序は理想的順序であるにも拘らず、アリストテレースは(V. 12) 歴史的事實を示すものと考へてゐる。それはあたかも理念として主張された國家契約説が國家の歴史的起源を説くものと誤解されてゐるに等しい。(3) ミュートスがロゴスの如く解され、象徴的比喩的なものも文字通りにとられて、眞面目に反駁されてゐる。たとへば「パイドーン」卷末のミュートスに描かれてゐる地下の流並びにそれと天界の流れとの聯關についてのミュートスがロゴスであるかの如く眞面目にとられ論駁されてゐる。(Meteorol. II. 2. 355 b f.)。更に「ティーマイオス」の世界構造についてのミュートスは文字通り時間的に解さるべきではなく、超時間的なものの時間的表現であるにも拘らず、その時間的順序について、世界の時間的始め(De coel. I, 10, 280 a 28 ff.) 世界靈魂(Met. XII, 3, 1071 b ff.) 時間の生成(Phys. VIII. 1, 215 b 17) 質料(De coel. IV. 2, 300 b 16 ff.) 等に關するミュートスが反駁されてゐる。(4) プラトーンの表現法に従はず、自由な自己の用語に躰じて述べてゐる。例へば「プラトーンは質料^{ヘテロ}と場所とを同じものであるとティーマイオス篇で言つてゐる」(Phys. IV. 2, 209 b 11.) とあるが、質料といふ文字は用ゐられてゐない。(cf. Zeller: op. cit. S. 203 ff.)。

以上の様な缺點が講義にもとづく^と考へらるゝ報告には存しないと保證することはできない。イデア數論については就中上述の(3)及び(4)がひそんでゐる懸念を抑へ得ない。イデア數と稱せられるものは圖式的説明であつたかも知れない。特に上掲(六六頁) 心理學卷一の生物の數、認識作用の數の如き。「國家」第八卷に見えてゐる所謂「結婚數」の如きものに古來泰西の多くの學者が如何に頭を悩ましたか。プラトーンには「結婚數」の如き遊戯もあることを心に

留めておくべきであらう。) さうしてプラトーン用のなかつた用語もプラトーンのであるかの如く語られてゐるかも知れない。更に我々はバーネット(同上書三一三頁以下)テイラー(「プレト」五〇三頁以下)の警告―それはプラトーン哲學をイデアII數の面のみ認める學者の側から發せられてゐるだけに特に耳を傾ける價值があらう―をも考慮しなければない。彼等はアリストテレースに頼るに困難な點として、(1)アリストテレースがプラトーン説の非常に同情のない批評家であること、(2)彼の時代のアカデメイア學園に於て導かれた結論から觀てゐること、(3)生物學的な彼は數學が嫌ひであつたこと、の三點をあげ更にプラトーンの名を上げてゐる箇所と或る人々と云つてピュタゴラス學徒または同時代のアカデミケルをもふくましめてゐると考へらるゝ箇所とを區別すべきであり、また事柄についての陳述をそれについての彼の解釋から峻別しなければならぬと主張してゐる。然し事實についての陳述も上述の缺點から考へるならば、バーネットの言ふ如く、そのまま信すべきものかどうか疑問といはねばならぬ。

更にアリストテレースのプラトーン「イデア説」批判^{*}に見ゆる誤解を考慮に入れるならば、我々の疑念は更に高まるであらう。

* 形而上學A卷九章、M卷四・五章に見出さるゝ「イデア説」批判はプラトーン一人に向けられてゐるものではなく、A卷の表現を用ゆれば「イデアを原因として立てた人々」に向けられてゐる。然し少くともA卷の批判は、A卷全體の構造と九章に「バードーン」があげられてゐることから見て、主としてプラトーンに向けられてゐると考へられる。

彼のイデア説批判の論點はさまざまであるが、今一々それについて考へない。彼の批判はツェラー(H. 24 S. 293)の表現を借りるならばイデアが「現象の外に質體的な或るものとしてそれ自身存在する」ものである點を中心として

廻つてゐる。彼がプラトーンのエデアを事物の二重化として批難するのはそのためである。然かも彼はエデアを個々物と同一平面に並在するかの如く考へてゐる。さうでなくしてどうして「第三人間」の如き批判が生れ得よう。「パルメニデース」前半に見らるゝエデア説批判はエデアを空間的にしか表象し得ないメガラ學派からの批判であるが、其處にも「第三人間」的批判が見出され、彼の批判と殆んど同一のものである。アリストテレスの入門當時にこの對話篇が書かれ、然もそのなかに「最年少アリストテレス」がパルメニデースの相手役を演じてゐるのは甚だ興味深い事である。それは兎に角かくの如き立場に於てはミニュートスもミニュートスの意味を失ふ。「バイドーン」のミニュートスを自然學的に解釋して眞面目に批判する立場はエデアを個々物と同一平面に並べて批判する立場に等しい。其處には眞に超感的なるものは存しない。形而上學Ⅰ卷の如き神學思想が現はれる所以である。エデアは個物と同一平面に並在するものではない。彼が個物の中にあるとする普遍者はエデアによつて始めて在るのであり、エデアなくしては個物のなかに普遍者はなく、従つて個物は個物として存在しない。然かもエデアは窮極に於ては超有たる善のイデアによつてあるものであつて、それ自身存在する實體ではない。プラトーンにとつては一切が超有と非有との緊張によつて在るのであつて、本來、有と云ふべき何物も存しない。超有も非有もそれ自身有として存するものではない。イデアを存在論的實體の如く考へるのは誤解と云はなければならぬ。然しかく云ふはもとよりアリストテレスが優れた獨創的な哲學者であつたことを否認するものではない。むしろ却つてそれはアリストテレスの獨創性を示す。彼によつて批判されてゐるが如きイデア、並びにミニュートスは當然否定さるべきものである。プラトーンのミニュートスは形而上學Ⅰ卷の如き神學思想となつたが、Ⅰ卷は彼の初期の思想に屬し(Jaeger: *Arist. 290ff.*) おそろ

く彼自身によつて捨て去られた立場であらう。彼はプラトーン説の誤解から出發して彼獨自の體系を建設したのである。あだかもヘーゲルがカントを誤解し批判することによつて悠大な體系を建設して行つたと云はるゝ如くに。誤解そのものは咎むべきであるにしても、誤解の當所に獨自なるものの誕生があつた。其處に歴史の否世界の不可思議な構造がある。アリストテレスのプラトーン誤解はすでに確定した問題であり、目下の急務はアリストテレスのプラトーン批判から如何にしてアリストテレス自身の哲學が誕生するに至つたかを究明することにあるとも云へよう。さうしてそれは即ちシュテンツェル (N. u. G.) の課題とした所でもある。然しながらそれは已にプラトーン研究の範圍を脱し、アリストテレス研究に屬する。シュテンツェルは其論究の途上に於て當初の目標を逸しアリストテレスとの聯關といふ見地からプラトーンを見過ぎてはゐないであらうか。更にプラトーンよりアリストテレスへの方向は進歩と云へるであらうか。プラトーン哲學の精神が眞に進歩の相をとつて生きんがためにはアウグスティヌス、近世初期の自然科學者(ケプレル、ガリレイ)、デカルトを経てカントに至る歩みがなければならなかつた。しかもその歩みと雖もプラトーンを完全に止揚し盡してゐるとは云ひ難いであらう。ひとりプラトーンに限らず哲學的人格は他の哲學のなかに止揚され終るものではない。

私は上來「プラトーンの講義」といふものが存在したものととして論述して來た。それはアリストテレス、その直弟子及び註釋家達の證言によつて確實と考へられたからである。然しアリストテレスの「不文の教説」「哲學について」の口述」といふ表現は必ずしも連続的な所謂講義を意味する必要はない。又此等の證言は總てペリパテイケルに屬するものであり、アカデミケルの書物には一つも見出されないのも不思議である。ヘルモドローソスの如きプラト

ーンの直弟子の言として傳へらるゝものもペリパテイケルの書物に於てである。また講義が行はれてゐたといふならば何故「善についての講義」のみが問題にされるのか。講義はそれ一つであつたのであらうか。直弟子アリストクセノスの證言があると云つても、彼はソークラテース、プラトーンに關する中傷的ゴシップの源泉である（次の「傳記資料論」參）。また講義といふ形式はプラトーン並びにアカデーメア學園にはふさはしからぬ形式である様に感じられる。然し私は講義が行はれたことを否定するのではない。只猶疑ふ餘地がある様に考へらるゝのである。

最後にアリストテレースは何故イデア説を述べるときには著作に訴へないかといふイニエーゲルの疑問に對しては、先づ一般に著作に訴へないことについて十二月號（三六頁）の「プラトーンの教育は書物よりはむしろデアレクタイケーを重んじた。アリストテレースにとつては、プラトーンの口述の方がより根源的な資料であつたに違ひない。」といふ言葉を繰りかへし、更に「イデア説」について特にさうである點については、書簡第七のプラトーン自身の言葉を以て答へとし度い。（三四一b以下）。

「多くの人々は私が熱心に研究してゐる事柄について、それを私自身から聽いてか或ひは他の人々から聽いてか、或ひはまた自分で發見してか、とにかくよく知つてゐると主張して、それについて書物を著はしてゐます。また今後著はす人々もありません。此等の人々について私は少くとも次の事だけは言ふことができます。この人達は、私の判断からしますと、その事柄については何もわかつてはゐないのです。この事柄については私自身の書物さへありませんしまた今後出来ることもないでせう。と云ひますのは、この事柄は、他の學問の様には、決して語る事が出来るものではなく、むしろ事柄そのものについて長い間共に研究し共に生きる時、突如として、あだかも飛び出づる火に

よつて點ぜられ火花の様に、魂の裏に生れ出て、かくして自分で自分を育てて行くものだからです。だが私は次のことだけは知つてをります、私によつて書かれるか或ひは語られる場合にそれは一番よく語られるでせう。……」

プラトーンはイデア就中善のイデアについて體系的にイデア説として述べることをしなかつたのである。彼が共同研究・對話に於て述べた言葉は臨機應變對機說法的の活潑自在のものであつたであらう。

第七書簡に於ける以上のプラトーンの言葉は我々プラトーン研究者を自省せしむると共に、アリストテレス及び其系統の人々の關説よりはむしろプラトーンの著作をこそ我々の研究の根本資料となすべきことを教へてはゐないであらうか。

今日書簡第七を疑ふ者はロバン以外には見當らない。(但しリツテルは此の部分を偽作とする)。なほ書簡第二(三一四C)に「プラトーンの著作といふものはありません。それは若いソークラテースの説です。」(大意)とあるが、この書簡は疑作である。

我々はアリストテレスの關説をプラトーン哲學の根本資料となすべきではない。然しながらまた我々はその資料的價値を全然否認するリツテルの見解にも與みし得ない。リツテルは言ふ。プラトーンはその死に至るまで作家として活動してゐた、従つてプラトーンの思想世界の、單に口述によつてのみ傳へられた、その最終形態といふ様なものは單なる妄想にすぎない。故にアリストテレスがその師の學園に於ける教授から我々に補足として報告しうる様な重要な事實—プラトーンの著作には見られぬ様な—を持つてゐるかも知れないといふ懸念は已に除外され終つてゐるも同然である。だからアリストテレスの陳述がプラトーンの著作から引き出されうるものと一致しない場合には、何よりも先づアリストテレスの誤聞並びに誤解といふことが考へられなければならない。(Ritter: Keung.

d. Pl. Phil. 1931. S. 10 f.)

然しながらたとひアリストテレースに誤聞・誤解があるにせよ、その闢説はなほ資料的價値を有する。もとより我々の立場はイェーゲルの如く之を根本資料と看做す立場ではない。むしろ却つてその逆である。我々はむしろプラトンの著作を熟讀することによつて觀得されたプラトンの哲學的精神の光によつて、アリストテレースの報告の意味を照し出さなければならない。かくすることによつて、それは、たとひ基本資料とはなりえないにしても、なほ副資料として、我々のプラトーン研究に對し貴重な役割を演ずることができらうであらう。(未完)